「猪土手」は農民たちの万里の長城

能登健●県立自然史博物館上席専門員

榛名山麓にある猪土手の調査をしているグループがいる。自然と人間のかかわりを考えることを目的にしているのだろう。日本各地でも盛んに調査が進められており、なかにはエコツーリズムのメッカになっているところもあるくらいだ。

ところで、東日本では「猪土手」と呼ばれているが、西日本では「猪垣」という。土手と垣の違いは簡単なこと。東日本の山麓は土壌の堆積が進んでいるために、溝を掘って土手を築く。これに対して西日本では岩山が多いために岩を積み上げて石垣を築くことになる。両者の違いは見た目で一目瞭然。効果には違いがないが、土手を築く手法ではその上に木柵が据えられ補強されることが多い。

一山を囲い込んでしまうほどの大規模なものも少なくない。その偉容さは、まさに収穫物を守るために立ち上がった農民たちの〝万里の長城〟だ。

猪飢渇と猪鹿追詰

猪土手は江戸時代の新田開発に伴って各地でつくられた。谷間の水田や山麓に開拓された畑はみるみるうちに広がった。それとともに猪や鹿の野獣退治もはじまった。

猪土手は村人総出で作られた。猪土手を横切る農道には木戸が作られ厳重に見張り番も立てられた。威嚇のための脅し鉄砲が領主から貸与されることもあった。落とし穴で捕らえられた猪は捕食の対象にもなったのだろう。

八戸藩（青森県八戸市）は江戸の味噌・醤油生産に目を付けて、広大な山野を焼き払っての大豆生産を開始した。その結果、焼畑跡地の草原が猪たちの良好な餌場になり、急激な大繁殖を助長した。ある時には3000頭もの猪が城下に迷い込んできたという。村里では猪の食害が猛威をふるって飢饉を招いた。寛延2年（1749）には4000人もの餓死者を出してしまったという。世にいう「猪飢渇」である。

一方、対馬藩（長崎県対馬市）では元禄12年（1699）に「猪鹿追詰」が計画された。その方法は、島を猪垣で六区分して順次追い詰めながら殲滅していく計画で、山野の樹木を切り倒し、強風を利用して野を焼き払った。8年がかりで3万頭近くいた猪をほぼ根絶やしにしたという。時まさに天下の悪法といわれた生類憐れみの令のまっ盛り。禁令を犯しての徹底した掃討作戦だった。だから、対馬には今でも猪がいない。

対馬藩では生け捕りにした猪の一部を近くの無人島に放して種の保存を図ったことを付け加えておこう。

肉を食らう

猪や鹿は日本古来の食用野獣で、縄文以来食べ続けられてきた。

シシは猪や鹿などの野獣の総称である。猪はイノシシ。鹿はカノシシともいう。カモシカはアオシシやクラシシの異称をもつ。シシは宍とも書き、獣肉の総称を意味する。要するに肉を食べる野獣をシシというのだ。

古墳時代には猪飼部と呼ばれる猪飼養の専門集団がいた。この「猪」が野獣の猪か豚なのかは議論があるところだが、いずれにしても猪が食べられていたことには違いない。

仏教は食肉を禁じている。平安時代には食肉禁止令も出されているが、対象は牛、馬、犬、鶏、猿の五畜であり、猪は含まれていなかった。だから、人々は野獣の肉を食べ続けていたのだろう。とくに、畜食を忌み嫌った江戸時代でも、猪は「ボタン」や「山鯨」、馬は「さくら」と呼べば肉ではなくなる。酒が般若湯となれば僧侶でも飲めることになるのと同じこと。言葉とはなんと便利なことか。

江戸の薩摩藩上屋敷で豚が飼われていたことが、佐藤信淵の『経済要録』に書かれている。それを証すように、最近の発掘調査では邸内から大量の豚の骨が出土している。薩摩藩は養豚業者でもあったのだ。

忘れられた猪土手

猪土手はいつのまにか忘れ去られていった。それはなぜだろう。

猪土手は猪から農作物を守るために必死になって作られた。農地が減ったわけではないので、忘れ去られた原因は猪がいなくなったからだろう。ある時に大雪が降って猪が死に絶えたのではとの説がある。また、疫病が流行って絶えたのだろうとの説もある。どちらの説も根拠はない。私は別の理由を考えている。

明治新政府は食肉解禁と鉄砲解禁の政策をとった。戊申の役などで使われた旧式銃が大量に払い下げられて、狩猟用に一気に広まったのだ。鉄砲を抱えた猟師の姿はこのようにして成立する。要するに、シシ肉が大量に食べられるようになり、猪は狩猟圧によって激減したのだろう。

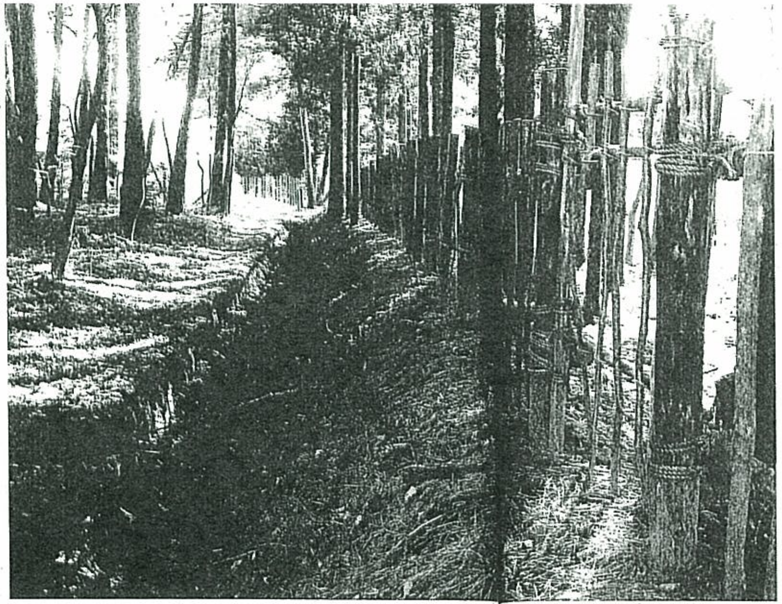
その結果、農民は猪を気にしなくなった。さらに、日本人はシシ肉から豚肉や牛肉に嗜好性が変化することによって、猪そのものを忘れだしたのだ。

共存は可能か

今、また猪が増えだした。かつては農地の開拓によって人が猪の生存圏を犯していった。しかし、今は耕作放棄地が増えたことによって猪の生存圏が回復したのだ。

江戸幕府の新田開発政策は飽くなき経済政策のはじまりだった。「猪飢渇」を地元で見続けた安藤昌益はその著書『自然真営道』で、これは人災であるとして批判している。猪を根絶させた対馬では、平成16年に「イノシシの所持又は持ち込みの禁止等に関する条例」が施行され、「猪鹿追詰」はいまだに続いている。

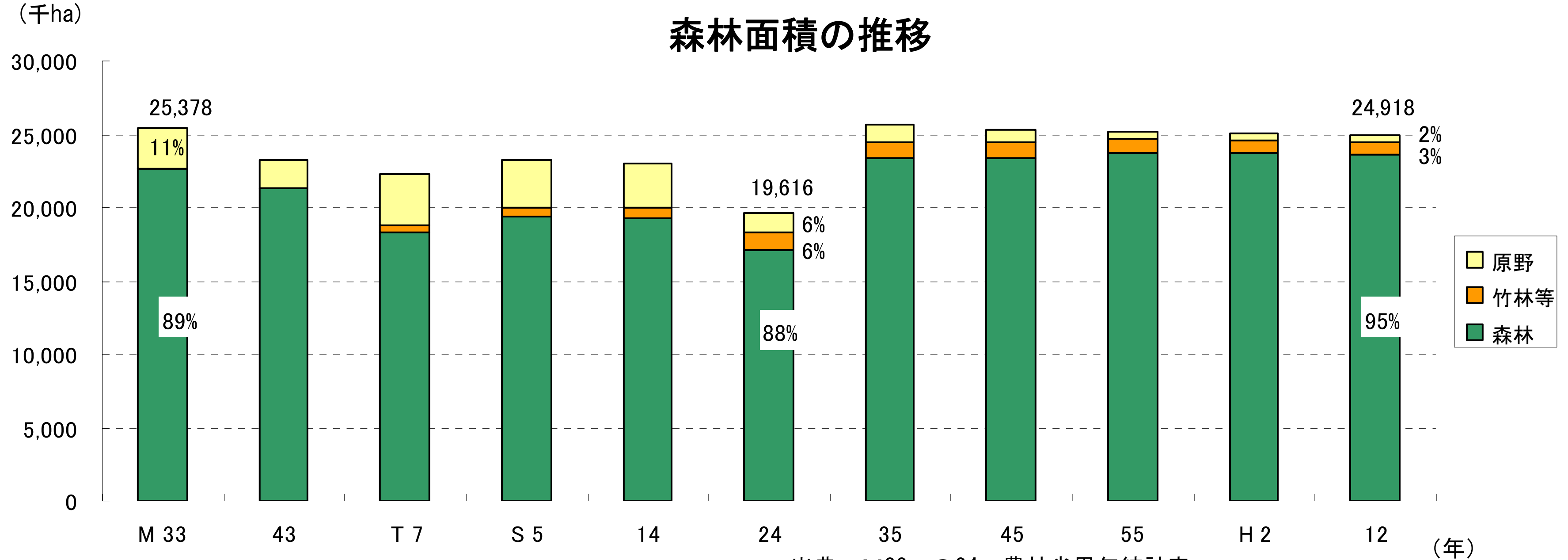
生態系は人の外ではない。そろそろ、人も生態系の中で生をつないでいることに気づくべきだろう。かつて猪は人の食物連鎖の中にあった。むやみに殺すことが動物愛護に反するならば、人は再び野獣を食さなければならないのだろう。亥年にあたって「シシを食え」とは奇妙な話だが、猪との共存はそれが一番自然のような気がするのは私だけだろうか。



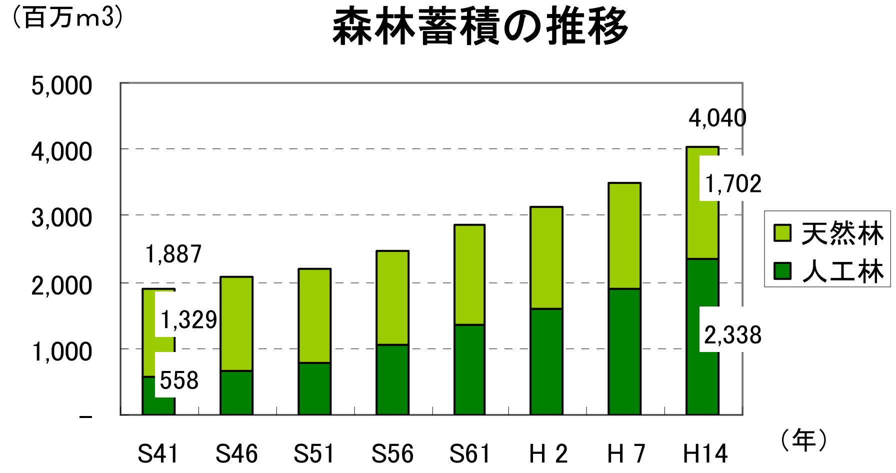
長野県塩尻市片丘南内田（県林業総合センター敷地内）に復元された「鉢伏連峰西麓の猪土手」。松本市中山から塩尻市下西条までの南北28キロにわたって築かれていた遺構の一部。山側に深さ約1メートルの堀、土を里側に盛った土手、土手の上に高さ1.2メートルの柵がある。山側への入り口には木戸も設けられている＝塩尻市教委提供

愛知県岡崎市中金町の「万足平の猪垣」（同県民俗有形文化財）。男川産の片麻岩を山すそを囲むように延べ60キロにわたって築かれている。高さ2メートル、上面幅0.6メートル、下面幅約1メートルで、外側が土手になっている所もある。古文書では延享3年（1746）から幕末にかけ、また文化2年（1805）の二期に築かれたとされる＝岡崎市提供

日　本　の　森　林



出典　M33～Ｓ24：農林省累年統計表
Ｓ35～Ｈ12：世界農林業センサス（森林以外の草生地を原野とした）
※　竹林等には、伐採跡地を含む



出典　森林資源現況調査

森林面積は約2,500万ha（国土の約67%）で、戦後ほぼ一定

人工林の整備により、原野面積は大きく減少

人工林面積は、戦後の造林により昭和24年と比べ倍増

・森林の蓄積は約40億m3、昭和41年の2倍以上に増加
・そのうち人工林は約23億m3で、森林全体の58%を占める